

四天王寺高等学校

入学試験問題

国語

平成25年度



一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

作詞家の阿久悠（一九三七—二〇〇七）の⑦ペンネームに、「ぼくのさよなら史」という文章があります。「さよならは有能で④ユウベンな教師であった」、「人間はたぶん、さよなら史がどれくらい厚いかによつて、いい人生かどうかが決まる」、といった「さよなら」がはらんでいる重い意味を語っているのですが、根底には、以下のような、①時代に対する危機認識があります。

『果たして今の人たちが、さよならという言葉を使うのだろうかと思うことがある。あまり聞いたこともないし、使っている場面を想像することもできない。そうか、「さよなら」は既に死語になったのだと気がつき、ということは、別れを自覚することもなくなり、これは全くもつて悲劇だなと、思えてきたのである。』

生活の中で、もう少し大仰について人生の中で、別れということに無自覚なら、感性をヒリヒリ磨くことも、感傷をジワッとひろげることも、それに②耐えることもできない。

人間の心というのは、いつも少し③湿りけを帯びていなければならないのに、カラカラに乾かしては味気ない。心に噴霧器で水分を与えるには、切なさや、哀しさや、寂しさの自覚が不可欠である。（中略）人の心にはさよならによつて湿りが加わるのである。

なぜ、さよならを言わなくなったのであろうか。なぜ、別れたことに気がつかないような不思議なことになったのであろうか。』
（「ぼくのさよなら史」）

阿久は、その原因が、交通手段の高速化や④ゲイタイやメールが日常のこととなり、「人間は人間といつもつながっている」、「人間は誰でもすぐに呼べば答える。時空を越える」といったような「④『錯覚』がきつと、『別れ』という厳粛な現実には鈍感にさせている」ことにあるのではないかと観察しています。それは、人間のもつとも大切ななものかを失っていることだ、と。

阿久は、みずからは作詞家として、「人間のさよならがダイナミズムを持つこと」を時代性と社会性において表現したいと意欲的に詞を書いてきた、が、まさか「別れに無自覚になる時代になるとは思つてもみながつた」と嘆いています。

「死語になった」かどうかは判断のむずかしいところですが、たしかに阿久の言うように、少し前の時代までは、別れの場面では、あちこちでふつと「さよなら」「さようなら」は使われていた。私たちの子ども時代では、たとえば、学校などでも、このあいさつで下校していたことを覚えているし、また少し古い映画などでは、この言葉で別れている場面は、あれこれ印象的に思い起こされます。東京オリンピックの閉会式で「サヨナラ」は I、この言葉は日常のあいさつとしては、あまり使われなくなってきたのは事実だろうと思います。

しかし、かといつてまったく使われていないというわけではなく、きわめて限定されたかたちでしか使われなくなってきたということではないかと思ひます。⑤阿久の物言ひとは少し違つてきますが、もうこれでおしまいだという男女が「もうさようならにしましょう」とか、大事な一人称（あなた）的存在が亡くなつてお棺のふたを閉めるときや炉に入れるときなどに、「おばあちゃん、さよなら！」などどつぶやくような場合に、です。

しかし、そうした限定のされ方自体に、阿久の^a懸念するような事態を見出すことは十分可能です。今の時代、どこかで「さよなら」「さようなら」を避けているがゆえに、この言葉があまり使

われなくなってきたのだ、と。「人間はたぶん、さよなら史がどれくらい厚いかによって、いい人生かどうかが決まる」と考えているものからすれば、その④カンジシな「⑥さよなら史」のつかみ方がみえにくくなってきたのだ、と。

私自身、そのことで⑦ツクセツに思い当たることがあります。

十数年前に父に胃ガンで死なれたのですが、おもに長男の私の判断で、父には告知しないという方針もあつて、最後まで「死なないもの」のように対応していました。告知しなかったということ自体は、ありうべき対応として今でもそれとしては後悔していませんが、そのことによつて、結局は、最後の別れを、「さようなら」というあいさつを回避してしまつたという思いが強く残っています。

死の一週間ほど前に、仲のよかつた親戚が来たときには、おたがいに目を真つ赤にして泣き合つて別れていたのに、「死なないもの」として扱う私には、父との間には、ついにそうした時は訪れることはありませんでした。

父は自分がガンであり、まもなく死ぬのだという思いがあつたことは十分うかがうことができたし、実際まわりの人にはそうも言つていた（と、あとで聞いた）のですが、同時に、最後の最後まで、ひよつとしたら、そうではないのかもしれない、というb^{一縷}の望みを、私らの言う「ガンなんかじゃない。死なないよ」という言葉につないでいたようにも思います。ですから、申し上げたように、告知しなかったということ自体は、⑦それはそれでひとつの対応としてありえたのだと今でも思つています。

しかし、⑧そのことによつて、結果的には、「無自覚」とまではいえなくても、父との別れ、「さよなら」の場面を回避しようとしていたのではないかともいえます。何度思い起こしても思い起こすたびに、その点において、⑨あるもやもやとした悔恨のようなものが、私にはたしかに残されています。

同じような思いは、あるいは父の側にもそれはあつたのかもしれないとも思つています。何かを置き忘れたままで、なにかこのままでは死にきれない思いをもつたままで逝かざるをえなかつたのかもしれない、とも。

ならば、どういう仕方それができたか、と問いなおすと、そこには考えなければならぬ問題がいろいろあるように思います。

注 ダイナミズム―ちから

問一 ―線⑦⑧のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ―線 a・b の意味として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 懸念する

ア 失望する イ 執着する ウ 主張する エ 心配する オ 推測する

b 一縷の望み

ア おぼろげな望み イ かなしげな望み ウ けなげな望み

エ ひたむきな望み オ わずかな望み

問三 — 線①「時代に対する危機認識」とありますが、どうなることを危機だと言っているのですか。解答欄に合うように、十字以内で抜き出さない。

問四 — 線②「耐える」とありますが、なぜ「耐える」というのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 別れということに無自覚でいたいと思うから
- イ 別れを悲劇として大仰にとらえ過ぎているから
- ウ 感性を磨き感傷を広げるのはつらいことだから
- エ 感性を磨くことは人生を分厚くすることだから

問五 — 線③「湿りけを帯び」るとはどういうことの比喩表現ですか。十五字前後で抜き出さない。

問六 — 線④『錯覚』とありますが、阿久はどう考えて『錯覚』というのですか。解答欄に合うように、二十五字以内で書きなさい。

問七 に入る最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 世界に広められたが、それとすれ違うように
- イ 世界に広められたので、それと合わせるように
- ウ 世界に広められたので、それに反発するように
- エ 世界に広められたが、それに引きずられるように

問八 — 線⑤「阿久の物言い」とありますが、具体的に阿久のどのような発言を指していますか。阿久の文章の引用部分『果たして〜あろうか。』から十五字で抜き出さない。

問九 — 線⑥「さよなら史」は、ここではどういう意味で使われていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 「さよなら」を避けず、どれほど重ねてきたかということ
- イ 「さよなら」の使い方がどのように変化してきたかということ
- ウ 「さよなら」を人生の中でどれくらい消化してきたかということ
- エ 「さよなら」の言葉をどれだけ多くの人と交わしてきたかということ

問十 — 線⑦「それはそれでひとつの対応としてありえたのだ」とありますが、筆者はこの言葉にどのような思いを込めていると考えられますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 詠嘆 イ 疑問 ウ 肯定 エ 推定 オ 否定

問十一 — 線⑧「そのこと」とはどういうことを指していますか。文中から抜き出さない。

問十二 — 線⑨「あるもやもやとした悔恨」とありますが、どのようなことに対する悔恨ですか。解答欄に合うように、十五字以内で書きなさい。

一次の文章は、主人公が、妻澄子と二人の子供真一・健二（ともに小学生）を伴って老いた父の見舞いをかねて郷里に帰省したときの話である。読んで後の問いに答えなさい。

見知らぬ若者の運転する軽トラックが県道に止まったのは、健二が、帰ろうぜ、とぐずり出したときだった。助手席にはザル一杯のオニギリと漬け物を持った母が乗っていた。

「ごくろうさん。お昼だよ」

母が林に入るか入らないかのうちに、子供達はザルにとびつき、休み場所の木材置場に運んだ。

母のうしろをついてくる灰色の作業服を着た若者は、軽トラックの荷台から降ろしたビニール袋を肩に担いでいた。風船のように膨らんだ袋の中には、肩のところで折れ曲がったうしろの方に水が揺れており、魚が入っていた。

「養魚場の春男ちゃんだよ。① 父さんが頼んだ魚持ってきてくれたんだよ」

母のあまりにも簡単な紹介に、若者は、どこへ、と照れながら彼女を見た。母は、下の沢さ、とぶつきらぼうに言った。

オニギリにかぶりついていた② 子供達は、魚を見ると口の中のゴハンをかますに飲み込んだ。

「これはヤマメですか」

真一が若者の背後から聞いた。

「ニジマスだ」

若者は無愛想にこたえて林の斜面を下って行った。

やれやれ、と声に出して、積み上げた唐松に腰をおろした母の説明によれば、何を思ったのか、父が村はずれの川端にある養魚場に電話して、生きたままのニジマスを四十匹頼んだのだという。そんなものどうするのさ、と母が聞くと、沢に放して子供達につかみ取りをさせる、とこたえた。なぜ、とさらに問い詰めると、あの子たちは魚取りの体験などないだろうから、とうるさそうに言ったのだという。

「だったら、どうして持つてく時間だとか、そういうことを相談してくれないんだいって怒ってやったのさ。昼には帰って来るだろうからって、オニギリいっぱい作って待ってたのにさあ」

母の怒りの口調につられて、③ 澄子が、すみません、と頭を下げた。

春男君という若者はずんずん下に降りて行くし、④ 子供達もオニギリを手にしたまま後を追っているの、仕方なく再び沢に降りてみることにした。

沢につくと、子供達はまず両手で水をすくって飲み、それからゴハン粒のついた手を洗った。

「密封されているのに、よく生きていますねえ」

真一が口のまわりをTシャツの袖で拭いながら質問した。

「酸素を入れてあるからな」

春男君はあつさり応えた。

ここらでいいかね、と言う春男君に、まあ適当に、とこたえると、彼はビニール袋の口をほどき、⑤ 砂でもまくような仕草で溪流にニジマスを放した。さあ行くぞ、とでもいった放流の合図を期待していたらしい子供達は、ちよつとの間あつけに取られて流れ下るニジマスの群れを見つめていた。

「ヤバいぜ。流れて行っちゃうぜ」

健二の声に、真一もあわててズボンをまくり上げ、流れに入った。

放流を終えた春男君は、つかみ取りの光景には興味がないらしく、ビニール袋をたたむと、それじゃ、と言つて笹の道を登って行った。魚は好きかい、と、お礼の意味を込めて下から呼びかける

と、春男君は前傾姿勢のまましばらく立ち止まり、はにかんだ赤ら顔の笑顔を一瞬だけ沢の方に向けてから、前よりも足早に登って行った。

子供達はニジマス相手のつかみ取りに思わぬ苦戦を強いられていた。春男君が放流した地点から三メートルほど下に岸の砂岩が水流でえぐられてできた小さな淵があった。

上から見ると子供一人が辛うじて入れる小型のバスタブほどの淵なのだが、手を入れてみると岸の下が思いのほか深くえぐれていた。ニジマスはその中に身を隠してしまつたのだ。

全身を濡らして頑張っていた彼らは、一匹の成果も上げられないまま、十分ほどして身震いしながら水から上がった。

「魚の体には触れるんだけど、逃げられちゃうんだよなあ」

めずらしく真一が興奮していた。

子供達の出た淵の中に入ってみたのだが、大人の腕も岸のえぐれの奥までは届かなかった。目で確認できないところを手先で探るのは気味の悪いもので、ときに魚体らしいぬめつたものに触れるのだが、そのたびに腕を引いてしまった。指の先には緑色の苔だけがからみついていた。

「どうですか。魚は取れましたか」

麦ワラ帽子をかぶった母と、空になったザルを手にした澄子が降りてきた。

子供達の、だめだあ、の声を聞くと、母の優しい口調は一変した。

「あの爺さんの考えることはいつもそうなんだよ。思いつきばかりでさ。思いつき食って生きてきたようなもんさ」

⑥母は深いため息をついてみせた。

ひとしきり、子供達からニジマスがつかみ取れない理由を聞いた母は、澄子の持っていたザルを真一に渡し、淵の流れ口に立てて構えるように言いつけた。真一は言われたとおり健二と二人でザルを淵に向けて流れの中に入れた。子供達の手配を終えた母から、ほれ、と顎をしゃくられて澄子とともに淵に入った。

「そこで足踏みしてみな、ほれ」

母の命令に従い、淵の中で足踏みすると、流線形の黒い影が数本、ザルの方に流れた。

「上げろ」

子供達も母の命令に忠実にザルを抱え上げた。

ザルの中には二匹のニジマスが跳ねていた。母は鎌で笹を切ると、子供達の持ってきたニジマスのエラに通した。

「うわあ、残酷」

健二の大袈裟な身ぶりに、食うんだよ、とだけこたえ、母はまたザルを子供達に返した。

おなじことを七回繰り返して、十三匹のニジマスが取れた。

「これは魚取りじゃなくて、回収ね」

淵の中での足踏みにも飽きてきた頃、澄子が小さくささやいて舌を出した。

「四千円も払ってんだよ、四千円も」

澄子の声を聞きつけたのか、熱意の失せかけている者たちに母の叱咤がとんだ。

その夜の夕食のおかずはニジマスの塩焼とタラの芽の天ぷらになった。おつな婆さんはタラの芽が初物だと言って、食べる前に山の方を向いて合掌した。それは何の意味ですか、と真一が聞くと、初物を食べる時、採れた地にお礼をしておくと、来年もまた山の神様が恵んでくれるのだ、と彼女は教えた。聞き耳を立てていた健二はすぐに真似をして合掌したが、真一は、迷信だな、と言っ

てごはんを食べ始めた。

「ほら、孫たちが取ったニジマスだよ。みんな喜んでよ」

母は父に塩焼を出すとき、⑦ 精一杯の愛想をふりまき、ニジマスの回収方法に関してはなにも告げなかった。

父は弱々しい笑顔を子供達に向けた。母の言動の変化でつかみ取りが不成功だった事実が禁句であることを敏感に感じ取った彼らは、声をそろえて、ありがとう、と言った。

老いた父が涙を見せ、その光景を見ておつな婆さんが泣いた。

母はやれやれというふうに口を開けて肩を落とし、隣に座る澄子の方を見た。感受性を押し量るような母の視線から遠慮がちに目をそらして、澄子は助けを求めるような横顔を向けてきた。

⑧ 「明日の朝はニジマスを釣りに行くぞ」

腹の底に力を入れて声を出した。

やったせ、と健二が手をあげた。真一はもらい泣きをしていた。

翌朝、早く起きて子供達と碓氷沢に行った。古い竹の釣り竿二本と七号のヤマメ針は、夜、父が物置から出してきてくれたものだった。物心ついてから、父が釣りをしている姿を見たことはなかった。釣りなんてやったのかい、と聞くと、ああ、とだけこたえ、イクラを三つ付ければオモリはいらねえ、と言い置いて寝てしまった。

早朝の碓氷沢は霧に覆われていて、深山の渓谷の様相を呈していた。背後でいきなりカシコウに鳴かれてとびついてきた健二は、腰のベルトをつかんだままびつたりうしろに張り付いていた。朝露に濡れた笹道を下り、淵の上に出て、母が持たせてくれた売り物のイクラを針に付け、真一と二人で糸を垂らした。

橙色のイクラがまだ水底に沈まない内に、真一の糸が下流に走った。背から顔だけ出していた健二が、いけつ、と叫ぶと同時に真一は竿を抜き上げた。

昨日のザルの中のものよりはるかに激しく暴れるニジマスが釣り上げられた。母のやり方を真似て、笹を切つてエラに通し、健二に持たせた。

真一は岸に置いた瓶の中からイクラを出し、教えられたとおり針に三つ付けて再び糸を垂らした。糸が下流に流れ、竿がしなり、また釣れた。しびれをきらした健二が張り付いていた背から離れて、竿を取った。イクラを付け替えてやつて健二に糸を垂らさせると、すぐに釣れた。岸に釣り上げたニジマスを彼は素早く両手で押さえ付けた。生まれて初めて自分の手で獲物を捕らえた健二の横顔は、なぜかテレビを見つめる父の顔に似ていた。

唐松林に朝陽が射し、もれてきた光の線条が上昇を始めた霧の層を透かして沢の水面に乱反射した。子供達は周囲で変化してゆく光の鮮やかさに目を奪われたのか、竿を肩に担いだまま呆然と沢の上流の方を見ていた。

⑨ 「きれいだなあ」

健二が久しぶりに素直な言葉を口にした。

注 おつな婆さん―同居しているおばあさん

問一 ――線①「父さんが頼んだ」とありますが、なぜそうしたのですか。解答欄に合うように抜き出しなさい。

問二 ――線②・④の「子供達は、魚を見ると口の中のゴハンをかまずに飲み込んだ」「子供達もオニギリを手にしたまま後を追っている」について、共通する気持ちを表す言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 一喜一憂 イ 興味津々 ウ 半信半疑 エ 抱腹絶倒

問三 ――線③「澄子が、すみません、と頭を下げた」とありますが、その理由として適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア オニギリをつくつた「母」に対して誰も感謝せずに食べているから
イ 子供達のために「父」が計画してくれたことだとわかっていたから
ウ 自分も「母」と一緒にお昼の支度をするべきだったと思ったから
エ 「母」が怒っていることに対して申し訳ない気持ちになったから

問四 ――線⑤「砂でもまくような仕草」とはどのような様子ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 重々しい様子 イ 苦々しい様子 ウ 淡々とした様子 エ 晴々とした様子

問五 ――線⑥「母は深いため息をついて」とありますが、「深いため息をついたのはなぜですか。二十五字以内で答えなさい。

問六 ――線⑦「精一杯の愛想をふりまき、ニジマスの回収方法に関してはなにも告げなかった」とありますが、その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 計画を成功させたのは自分だという自信を持っていたから
イ いろいろと気を遣っていた澄子を安心させたかったから
ウ 計画を成功させたい「父」の気持ちを察していたから
エ 家族みんなが喜ぶ姿を見ることは気持ちがいいから

問七 ――線⑧『明日の朝はニジマスを釣りに行くぞ』腹の底に力を入れて声を出した」とありますが、なぜそのようなことを言ったと考えられますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア まだ二十数匹残っているので、残りを釣り上げて家族と一緒に食べようと思ったから
イ 子供達に自分の手で魚を捕らえさせることで、みんなの気持ちを晴らそうとしたから
ウ 「母」の気持ちを押し量ることができない澄子をなんとかして助けようと思ったから
エ 魚のつかみ取りが失敗だったので、せめて釣りの楽しみを子供達に教えたかったから

問八 ――線⑨『きれいだなあ』健二が久しぶりに素直な言葉を口にした」とありますが、健二は自然に対してこの日まずどのような感じをもちましたか。それがわかる一文を抜き出し、最初の五字を書きなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある人は、人は慮りなく、いふまじきことを口疾くいひ出し、人の短きをそしり、したることを難じ、隠すことを顕し、恥ぢがましきことを面だす。これらすべて、あるまじきわざなり。われはなにとなくいひ散らして、思ひもいれざるほどに、いはる人、思ひつめて、いきどほり深くなりぬれば、はからざるに、恥をもあたへられ、身果つるほどの大事にも及ぶなり。笑みの中の剣は、さらでだにもおそるべきものぞかし。心得ぬことを悪しきまに難じつれば、かへりて身の不覚あらはるるものなり。

おほかた、口軽き者になりたれば、「それがしに、そのことな聞かせせ。かの者にな見せせ」などいひて、人に心をおかれ、隔てらるる、くちをしかるべし。また、人のつつむことの、おのづからも聞こえたるにつけても、「かれ離れじ」など疑はれむ、面目なかるべし。

しかれば、かたがた人の上をつつむべし。

問一 — 線①「短き」はここではどういう意味ですか。「短」の字を使った漢字二字の熟語で答えなさい。

問二 — 線②「難じ」とありますが、基本形「難ず」はどういう意味ですか。解答欄に合うように漢字二字で答えなさい。

問三 — 線③「身」とは誰のことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ある人 イ われ ウ いはるる人 エ 作者

問四 — 線④「人に心をおかれ」とありますが、ここでの「心」はどのような気持ちですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 威圧される気持ち イ 敬愛する気持ち ウ 敬遠する気持ち
エ 信頼される気持ち オ 憎悪する気持ち

問五 — 線⑤「つつむ」はどういう意味ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア あつかう イ かくす ウ たえる エ はじる

問六 本文の内容をことわざで表すと、どうなりますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 口はわざわいのもと イ 人のうわさも七十五日
ウ 人の口に戸は立てられない エ 目は口ほどにものを言う